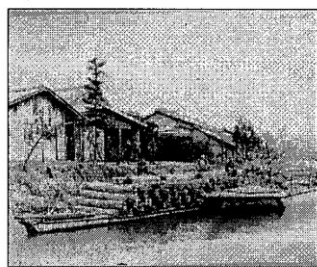


「角堂浜と中の島」
往時の住道駅前の風景

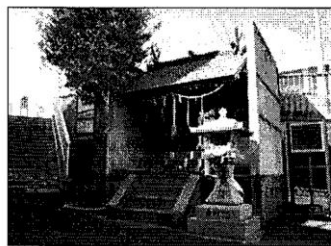


河内平野を南流する寝屋川と北流する恩智川が合流するJR住道駅の北側には、かつて角堂浜といわれる船着き場がありました。江戸時代中期（18世紀ごろ）から、角堂浜には貨物船や野崎まじりの屋形船などが集まるようになり、運送業者や料理屋などが軒を並べ、とてもにぎわったそうです。現在寝屋川の護岸堤防沿いにひっそりと立つ住吉神社は、水上交通の無事を願って角堂浜に建てられたものと考えられています。

明治22年（1889）、町村制の施行にあたり、角堂浜を中心として栄えた三箇・御供田・灰塚・尼ヶ崎・横山・川中新田の各村が集まり、住道村となりました。「角堂」の字を改めた「住道」の地名はこの時にできたものです。明治28年（1895）には、浪速鉄道（現在のJR学研都市線）の開通により住道駅ができ、次第に陸上交通が発達して



大正時代ごろの角堂浜（中の島付近）



住吉神社の祠

いきますが、自動車が普及し始める昭和の初めごろまで、寝屋川の舟運は大阪と北河内を結ぶ重要な交通・輸送手段でした。

ところで、角堂浜のすぐ西にはかつて中の島といわれる東西に細長い砂州があり、明治29年（1896）、この地で河州煙草株式会社の工場が操業を開始しました。翌年の打上トンネル（現在のJR東寝屋川駅付近）建設の際に百万個のレンガを納入していることから、かなりの生産力を持つ工場だったと考えられます。河州煙草は短期間で撤退しますが、その後も一時期、土管製造工場などが操業していました。中の島は、昭和50年代の寝屋川護岸工事を取り除かれ、現在は往時の面影は残っていません。

（生涯学習課）

「JR住道駅」
明治以来の大東の玄関口



大東市の玄関口として毎日多くの人が利用しているJR住道駅は、明治28年（1895）、浪速鉄道の開通に伴い開業しました。浪速鉄道は、片町〜四条間を39分で結び、途中、放出・徳庵・住道の各駅に停車する路線でした。開業当時、周辺では唯一の鉄道路線だったことから、中河内方面に通じる住道駅では生駒の宝山寺や石切神社（現・東大阪市）などへ向かう参詣客が大勢下車し、駅前の商店街は大変な賑わいだったそうです。

浪速鉄道は、開業後間もない明治30年に関西鉄道に併合され、明治40年に国有化されました。大正時代からは、始発駅にちなんだ「片町線」の名で呼ばれるようになりました。あまり知られていませんが、昭和54年には関西の国鉄路線で初めて自動改札機が片町線に導入されています。昭和63年、JR「学研都市線」と名を改めましたが、「片町

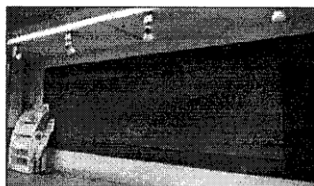
線」の愛称は今でも多くのの人に親しまれています。

住道駅の東改札口を出ると、左手には、飯盛城や三箇島の教会など戦国時代の市域の情景を描いた信楽焼の陶板壁画が飾られています。駅北側にある商業ビル・大東サンメイツは、昭和53年、駅前開発の目玉事業としてオープンしました。サンメイツ2番館のあたりには、かつて大東市の前身である住道町の役場がありました。市制施行後、住道町役場は大東市役所に変わり、昭和40年に現在地に移転するまで機能していました。近年の駅前開発では、戦国時代のキリシタン伝播以来、大東と縁が深いスペインの街並みをモデルとし、駅北側の商業ビル・ポップタウンや南側の末広公園などにスペイン風の要素が取り入れられています。

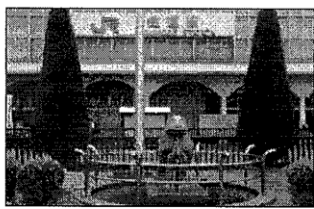
（生涯学習課）



昭和40年頃の片町線



住道駅改札前の壁画



スペイン・アルハンブラ宮殿のライオン像を模した駅前のライオン像